

が全国から集まったが、展覧会を五、六度開いても何の変化もない。そこで運営方法に関する反省が生じ、作家にして指導力があり、外国工芸品の思想や傾向をよくつかんで日本に知らせることのできる人を海外調査に派遣することになり、山崎もその一人に選ばれたのだという。山崎の外に和田三造、高村豊周、杉田禾堂らが調査員となり、彼らは帰国して輸出品産地を回り、或いは展覧会審査にたずさわり、マンネリズム打破を試みた。しかし、それは容易なことではなく、そのうちに戦争が始まって輸出品どころではなくなり、昭和十六年十二月以降は輸出の声も地を払って全てが「勝つため」の声に一変してしまったのであった。

⑦ 久米桂一郎銅像除幕式

昭和十一年七月二十七日、校庭で久米桂一郎銅像（胸像）の除幕式が行われた。これより先き、同十年五月、岡田三郎助、太田三郎、白瀧幾之助、武内金平、田辺孝次、津田信夫、筒崎謙斎、西田正秋、宮本純一、和田英作らが建設会実行委員となって建設費を募集し、その結果三三〇〇円余り集まった。そのうち二五〇〇円を銅像建設費とし、北村西望が原型制作および台座設計を、川西松次郎が鑄造を担当。西望は十一年二月一日原型制作に着手し同年六月一日に完成（制作費四五〇円）させた。

除幕式は白瀧幾之助の司会をもって進められ、津田信夫の事務報告、実行委員長和田英作の式辞、本校校長事務取扱岡田三郎助の挨拶、来賓式辞、遺族謝辞があり、翌月本校へ銅像が寄贈された。